

令和6年度

試験名: 推薦入試

【医学群看護学類】

区 分	標準的な解答例又は出題意図
小論文(1)	<p>出題意図：書籍から抜粋された文章を読み、その内容を的確に捉え、これまでの自らの知識や経験と照らし合わせて、出題者の意図を考え、自らの意見を含めて文章化することができるか、すなわち、読解力、論理的な思考力、表現力を見る。</p> <p>問1 あなたの身近なコミュニティではどのように道徳的判断がされていますか。コミュニティを一つ選び、説明した上で、本文を踏まえて述べなさい。</p> <p>採点基準：道徳的判断に関する理解や経験、高校までに学んできた社会、文化、倫理などの知識を活かして論理的に述べているかどうか。本文から、社会で行われている道徳的判断の基準は一つではないことを読み取っているか。これらを踏まえて、倫理的思考のありかたについて考え、論理的に説明できているかを採点する。</p> <p>解答例：</p> <p>私が所属するコミュニティは、日本の一都市にある共学高校のクラスである。外国人生徒はとても少なく、いてもクラスに1名程度で、生徒も教員も圧倒的に日本人が多い。私が所属する高校3年生の年齢は17～18歳で、クラスの男女比はほぼ半々である。</p> <p>私のクラスで、普段、道徳的判断はどのようにされているだろうか？例えば新型コロナウイルスのパンデミック下では、特に1～2年生の頃、校内では常にマスクを着用しなければいけなかった。しかし常にマスクを着用するのは確かに息苦しく、マスクを正しく着けていない生徒が時々いた。そのような生徒を見かけると担任の先生は「マスクを正しく着けなさい」と指導していた。クラスメイトは表立って指摘することはなかったが、そのような生徒が軽く咳をしたりすると明らかに迷惑そうな不安そうな表情をしていた。</p> <p>私たちの反応は正義の倫理とケアの倫理のどちらの原則に基づいていたのだろうか？学内でも街中でもマスク着用を促すポスターが貼られ、飛沫感染を防ぐためにマスクをするのは理にかなっており、常識であり、当時の社会の共通ルールだった。だから、正義の倫理に基づいていたと言える。しかし、ケアの倫理も併存していたと思う。マスクを適切にしていない生徒を見ると、「もしあなたがコロナにかかっている、誰かに移したら、可哀そうじゃないか」という怒りや心配の気持ちも、あったからこそ、迷惑そうな不安そうな表情になったのだと思う。おそらく先生にもあったと思う。</p> <p>本文中に「ほとんどの人はどちらかの志向に偏っているが、両方を使い分けていることも多い」と書かれている。日本人は空気を読んでその場の暗黙のルールに合わせる事が多く、他人に迷惑をかけないことを道徳とみなす傾向がある。これは、正義の倫理とケアの倫理が共存している状況といえる。私のクラスではたいていの場合、校則などのルールや常識を根拠として道徳的判断をしているが、同時にケアの倫理も使っている。このことは上記のマスクの例からも結論付けることが可能である。</p> <p>問2 道徳的判断の方法が葛藤する状況でのあなた自身の倫理観について、身近な経験の例を挙げて述べなさい。</p>

採点基準：問1の採点基準に加えて、自分自身の倫理観について、本文で示された理論の理解をもとに、困難な状況を想定し、問題解決の方法を考え、論理的に説明できているかを評価する。

解答例：

ケアの倫理と正義の倫理が共存して道徳的判断が導かれることは多く、そのような場合には、自信をもって道徳的判断が導かれ、行動にも移しやすい。逆に、二種類の倫理指針が相いれない場合には道徳的判断はとて難しくなる。両者が葛藤する状況とは例えば、共感ではできてもその社会のルールに反したり、あるいは、正しいと頭でわかって共感の気持ちがわからない場合などが想定される。このような場合には確かに倫理的判断はとて難しく感じる。

後者の身近な例として、数か月前に外国人限定の奨学金の応募案内を見かけた時に自分の中に生じた葛藤を思い出す。その奨学金はある日本企業によるもので、日本に住む外国人のみを対象とした留学支援で、米国ワシントンDCへの往復渡航費、国際機関での研修費、生活費、さらにお小遣いまでを含む、高額な助成金だった。私は自分のクラスの途上国出身の留学生を思い出し、この応募案内についても教えてあげたら喜んでくれるだろうと思った。しかし、同時に私には複雑な気持ちもわいた。彼女はこれまでもヨーロッパや中東などいろいろな国に行ったことがあり、私は日頃から羨ましいと思っていた。私には海外経験がないが、もし奨学金がもらえたらぜひ行ってみたい。でも日本人である私には応募資格がない。なぜ、日本の企業は、貧しい日本人高校生もたくさんいるのに、外国人を優先して支援するのだろうか。世界全体で見れば先進国と途上国の経済格差を改善する必要があることは頭ではわかっていたが、私は個人的に、理不尽さへの憤りと悲しさがなかなか消えず、結局私はその募集案内を彼女に教えてあげなかった。

応募は締め切られ、彼女が米国留学に行くことはなかった。私の中には今でも罪悪感が残っている。この文章を読み、なぜ私は道徳的な判断ができなかったのだろうと考えた。私は正義の倫理をもっと確固たるものに強化しておくべきだった。あるいは、外国人に対するケアの倫理を少しでも備えておくべきだった。私は、正義について知識や経験が少なく、自分とクラスメイトというとても狭い事例しか考えられなかった。また、留学生クラスメイトや他の在日外国人に深い共感を寄せられるほどの人間関係を築いた経験がなく、むしろ、嫉妬心や無力感が強かったことを自覚していなかった。つまり、私の倫理観はどちらも未熟で、表面的な正義の倫理と、ケアの倫理のなさが、葛藤した結果、道徳的な行動ができず、後悔が残った。

今後も人生において、二種類の倫理が葛藤する状況に直面するだろう。今回のような罪悪感や後悔をなくすためにも、様々な人生経験や勉強を重ねて、自分の中の正義の倫理もケアの倫理も両方を成熟させて倫理観を育てていきたい。

小論文(2)

問1. 思春期の若者の sleep need の特徴について、本文の主旨を踏まえて説明しなさい。その上であなたの考えを述べなさい。

出題意図

思春期の若者の Sleep need の特徴を正しく捉え、自身の sleep 経験を健康と関連付けて考える問題である。文章読解能力および本文の内容を踏まえて自らの考えを分かりやすく説明し記述する文章表現力をみる。

採点基準

Sleep need の特徴の説明と、自らの考える sleep need について本文の内容を踏まえて論理的にわかりやすく記載できるかを採点する。

### 解答例

本文では10代の若者に焦点を当て、どの程度の睡眠をとるべきかについて先行研究に基づいて論じている。睡眠ニーズは個人間で差があるため定義することは難しいが、どれだけ眠れるかという程度として定義されることもあれば、身体的・精神的に健康であるために必要とされる睡眠と定義される場合もある。最近になって科学者たちは次のような見解に達した。

- ・6～13歳の若者は、毎晩9～11・12時間の睡眠をとるべきである。

- ・14～17・18歳の若者は、毎晩8～10時間の睡眠をとるべきである。

睡眠時間がこれより短い若者は、怪我、抑うつ症状、薬物使用、過体重や肥満になりやすいという研究結果もある。ただし、推奨される睡眠時間には上限もある。何故なら、寝過ぎは医学的・精神的な健康状態などに、何らかの問題がある兆候である可能性があるためである。

たとえば、ある研究では、毎晩の睡眠時間が5時間未満または10時間以上の高校生は、糖尿病の兆候であるインスリン抵抗性が高いことが報告されている。別の研究では、睡眠時間が5時間未満または10時間以上の10代の若者は、睡眠が8時間程度の若者よりも自殺未遂が多いことが報告されている。つまり、これらの推奨範囲を健康的な「スイートスポット」と考えることができる。

次に、睡眠ニーズについての私の考えを述べる。私自身も10代の若者であるが、以下の点については、本文に記述されている内容に同意する。

- ・どの程度の睡眠が必要かについては、個人差がある。

- ・十分な睡眠時間は、身体的・精神的健康を保つうえで重要である。

- ・睡眠時間が足りないと、健康面で悪影響をおよぼす。

私自身の睡眠をふりかえてみると、平日の睡眠時間は6～7時間程度であるが、睡眠不足とはあまり感じていない。もしかすると身体がその睡眠時間に慣れてしまっているのかもしれないが、体調が悪いということはないので、おそらく問題ないのだと思う。本文中には、「14～17・18歳の若者は、毎晩8～10時間の睡眠をとるべきである」と書かれているので、この基準に照らし合わせると、私の睡眠時間は不足しているということになる。そう考えると、8～10時間の睡眠をとった場合には、私の体調がさらに良くなるということがあるとも考えられる。このことについては、複数の研究結果をまとめることで、何らかの答が得られるのではないかと期待する。

問2. Social jetlagについて、本文の主旨を踏まえて説明しなさい。その上であなたの考えを述べなさい。

### 出題意図

Social jetlagが何を意味するかを本文全体から正しく捉え、要約する能力をみる(文章読解能力、文章表現力)。また、本文の内容を踏まえて自らの考えを分かりやすく説明し記述する文章表現力をみる。

### 採点基準

Social jetlagが示す内容を理解し、著者が述べていることを分かりやすく説明できるか、および、自らの考えるsocial jetlagについて本文の内容を踏まえて論理的にわかりやすく記述できるかを採点する。

#### 解答例

Social jetlagは社会的時差ボケのことを意味しており、Dr. Till Roennebergが提唱した概念である。これは、身体はもっと眠りたいといっているにもかかわらず、学校へ行くために早く起きなければならないという社会的プレッシャーがある時におこるもので、まるで別の時間帯に住んでいるかのような状況を作り出す。社会的時差ボケは10代がピークであることが研究で示されている。社会的時差ボケは、学業成績の低下、薬物使用、抑うつ症状、肥満、特にすでに太っている人の肥満と関連している。さらに「間違っただ」時間帯に起きていると学習が難しくなることや、身体機能に異常をきたすことも報告されている。具体的には、食欲やブドウ糖代謝をコントロールするホルモンに変化が生じ、インスリン感受性が低下する。したがって、10代の若者に早起きを強いることは、脳や身体の機能を損なう可能性があることが示唆されている。

次に、社会的時差ボケについての私の考えを述べる。時差ボケというと、時差がある国に旅行した時に「夜眠れない」「日中眠くなる」などの体調の変化をきたすことを意味していると考ええる。普段は寝ている時間に起きていなければいけないので、その状況と身体のニーズが合致しないことになるため、様々な症状が現れるのだと思う。本文に書かれているように、まるで別の時間帯に住んでいるかのような感覚をもたらしているといえる。しかし、10代の若者が遅刻しないで登校するために早起きすることは当然のことであり、「間違っただ」時間帯に起きていると考える若者は少ないのではないだろうか？少なくとも私自身は、そのように考えたことはない。ただし、十分な睡眠時間をとることは健康にとって重要であると考えるので、早起きせざるを得ない状況の場合には、その分早く寝るということを実施すればよいと思う。